

令和元年度事業実績報告書

社会福祉法人 椎原寿恵会

佐賀事業部

<特別養護老人ホーム 真心の園>

平成29年12月より休止中の旭1階の1ユニット再開を一番の課題として取り組みを行ったが、職員の退職等もあり、再開する事が出来なかった。職員不足は現在も慢性化しており、来年度も継続して新規職員の獲得、現任職員の負担軽減に努めていく。

入居者の高齢化・重度化も継続しており、死亡退居者・長期入院による退居者が多い時で月に7名の時もあり、新規入所の調整に戸惑う事も多かった。昨年ショートステイ9床分を定床化し特養定員129名（休止中の10床を除く）となったが、特養の入居者を充足する事が出来ず、空床利用を活用したショートステイ利用がメインとなり、今一つ活用が出来なかった。最終の稼働率として、旭1階休止の影響もあり、入居稼働率は85.7%にとどまった。

令和2年度は、積極的に居宅系事業所への施設入所状況の案内、医療機関においては各病院の医療連携室に定期的に出向き、営業の強化を図る。協力医療機関であるまごころ医療館とは引き続き、連絡・連携を密に行い、ショートステイ長期利用者をふくめた待機者の確保と、新規入居者獲得について相互の連携を強化し稼働率の向上を目指す。

<真心の園ショートステイ>

安定した利用者数の獲得に向けた取り組みを年間を通し実施したが、前半の利用者減が影響し、最終実績としては1日平均12.7名にとどまった。来年度は定床化した特養枠の有効活用を目指し、ロングショート利用者や特養待機者とも連動させた新規利用者獲得調整を行い、稼働率90%を目標とし、年間を通した稼働率アップへつなげていく。鳥栖広域内でもショートステイのベッド数は減少している為、積極的な営業活動を実施し、定床化ベッドを除く11床の満床維持に努めていく。

<デイサービス事業>

- ・関連機関及び事業所との連携を強化し、利用者・家族のニーズの把握・考察行い、サービスの変更や追加の提案、多様なケースの受け入れなどに努めた。

- ・内・外部研修の参加・実施し、接遇及び技術・知識の向上に努めた。研修や一人一人の自覚によりリスクマネジメントに取り組むことができた。

- ・利用者の身体機能・残像能力を把握し、その有する能力に応じた自立支援が営めるよう適した日常生活の介護ができた。また、利用者の意向及び趣味を考慮し、生活にハリを見出せるアクティビティに取り組むことができた。

<訪問入浴サービス事業>

事業所への営業活動を実施。利用者の状況を把握し、家族、主治医、ケアマネージャー等との連携を図り、安全で快適な入浴の提供ができた。また、車両・物品のメンテナンスを行い、安全性を重視した業務が出来た。

<ホームヘルパー事業>

(真心の園ホームヘルパーステーション)

・毎月のミーティングで情報共有を図り、利用者が安心して在宅生活を送れるよう支援することが出来た。内外部の研修に積極的に参加し、個々のスキルアップにつながるよう努めた。

(鳥栖市中央ホームヘルパーステーション)

・新規利用者の受け入れを積極的に行えた。
・ヘルパー間の報告・連絡・相談の徹底に努め、利用者の少しの変化でも報告を行い、ケアマネとの情報共有を行いながら支援の連携に努めることができた。

<居宅介護支援事業>

・地域ネットワーク会議や地域ケア会議、自立支援ケア会議に参加する事で行政や各地区地域包括支援センター、その他各関係期間との連携を図る事が出来た。

・入院時の情報提供や退院時のカンファレンス参加の調整など医療機関との連携がスムーズに図れた。

・各種研修会参加で持ち帰った内容を事業所内で更に勉強会を開催したり他法人との事例検討会を実施し、ケアマネージャー個々のスキルアップができた。

<給食サービス事業>

・配食数・利用者数共に前年度にくらべ、鳥栖地区が年間1,557食減少、みやき町が2,863食増加している。利用者数は鳥栖地区が186人減少 みやき町は56人増加している。5月より鳥栖地区が720円から800円に変更したため、増益となった。

・利用者のニーズに合った食事形態の提供、食中毒予防及び感染予防に努めた。
・利用者の安否確認を行ない、必要に応じて行政等への情報提供を行った。
・車両事故に関しては2件発生している為、安全運転を心がけるよう徹底する。

<鳥栖市鳥栖西地区地域包括支援センター>

鳥栖西地区地域包括支援センターは包括支援センター事業の委託を受け10年目を迎える。

介護・福祉行政の一翼を担う「公益的な機関」として、公正、中立性の高い事業運営を今後も継続して行っていく。

地域包括ケアシステム構築に向けて、高齢者の生活を総合的に支えていく為の拠点づくりを目

標とし、地域の方が住み慣れた地域で安心して生活できるよう、今年度も積極的に活動を行っていく。

平成30年4月より新たに「認知症地域支援推進員兼生活支援コーディネーター」が配置となり、地域包括ケアシステム構築に向けての包括支援センターが担う役割も大きくなっている。今後も地域に根付いた活動と高齢者の生活を総合的に支えていく為の拠点づくりを目標とし、地域の方が住み慣れた地域で安心して生活できるように努める。地域食堂（多世代型の居場所・あさひキッチン）の協議体の立ち上げ支援を行う事ができた。今後も団体に対し、側面的な支援は継続して実施する。地域の繋がりが求められる中で、地域包括支援センターがその一役を担い、地域の支え合いの体制づくりを推進すると共に、要援助者に対する効果的かつ効率的な支援体制の確立を目指していく。

<ケアハウス花みず木>

- ・平成31年4月1日～令和2年3月31日の入居率は年間を通して100%を達成致しました。昨年に引き続き、感染予防対策を実施し、入居者の体調面において健康チェック（現在も、毎朝の検温実施・必要者の血圧測定）を行い、各人の体調の変化が早期発見できるよう努め、家族・医療機関・福祉との密な連携を図りました。
- ・精神面にも気を配り、入居者の声・訴えに耳を傾け、不安・戸惑いが解消できるよう、日頃より状況把握に努め、共感と受容の気持ちで対応してきました。
- ・介護保険適用者が全入居者の4分の3以上を占めていますが、各在宅福祉サービスを利用し、自立生活の支援をしてきました。
- ・活動行事では、要介護者も参加できる環境を作り、地域の方々との交流や自然に親しむ外出行事など行いました。居室への閉じこもりを防ぐ為、施設内での楽しみ（カラオケ・おやつ作りほか）を取り入れ、ケアハウスの入居者同士の交流も増え喜ばれています。

<グループホーム和が家>

- ・主治医や訪問看護ステーションとの連携により、利用者の体調管理や急変時の適切な対応に努めた。
- ・地域との関わりを深める為、夏休みのラジオ体操の際には子供クラブにグループホームの敷地を開放したり、夏祭りに招待し入居者も喜ばれた。地域の代表者やご家族などにグループホーム運営推進会議へ参加していただく事ができた。喫茶店へ外出したり、グループホーム野菊の里の行事に参加した。

<グループホームみどりヶ丘>

- ・「ひとりひとりのマイホーム」を目指し入居者様が自分らしく過ごせるホーム作り、自立支援に努めた。

- ・月 1 回入居者が楽しめる行事を企画・実施する取り組みを行い、入居者様と職員一緒に楽しんだ。
- ・介護予防体操や勉強会等を通してみどりヶ丘団地の皆さんとふれあったり、相談を地域に根ざしたグループホームを目指し地域との関係作りに努めた。
- ・保育園が隣接されている事を活かして、日常的な子供とのふれあいで心身の活性化に努めた。
- ・ホーム内外の研修に参加し、職員の質の向上に努めた。

<みどりヶ丘保育園>

- ・保育士不足により一時保育、休日保育は当分の間休止することとした。延長保育は月決め者が減り、急な残業等による日割り延長者が大半を占めている。
- ・支援センターは地域の子育て中の若いお母さん方に対し、遊びの広場、公民館の出前保育等において育児相談を実施。子育てに悩むお母さん方のよき相談相手となっている。
- ・発達障害児が多くなってきたので、保護者との信頼関係を築き関係機関との連携を密にして早期療育に向けて努めている。
- ・同一敷地内のグループホームとの交流も随時実施した。

<まごころ保育園>

- ・平成 30 年 4 月 1 日に事業所内保育施設として開園し 2 年目となった。園児 14 名でのスタートであったが、職員や地域枠の利用者も増えて 18 名（職員 7 名、地域枠 9 名）の園児を預かることができた。年間を通して未満児の問い合わせが多く、定員数を超えても受け入れができるよう今後柔軟に対応していきたい。
- ・園児数増と同時に行事等も充実させ、真心の園の利用者との交流も随時行った。
- ・初年度より発達障害児の対応に苦慮したが、保護者との信頼関係を築き、関係機関との連携を密にすることで対応に努めた。

鹿児島事業部

<ケアハウスかせだ>

令和 2 年 3 月 31 日現在の在籍数は 30 名（単身 28 名 夫婦 1 組の入居者）、高齢化が進み平均年齢が 84 歳を超えています。介護認定者は 21 名となり訪問介護利用者が 8 名、認知症対応型デイサービス利用者が 2 名、有馬病院デイケア利用者が 8 名となっております。

<デイサービス事業>

(デイサービス遊逢)

認知度の向上とともに、徐々に新規利用者が増えてきた。6月から毎週水曜日に認知症カフェを実施したことで、施設入所や入院による利用終了はあったが、補えるだけの新規利用者確保に繋がった。一方、スタッフの確保・定着が上手くいかず、少ないスタッフに負担を強いることがあった。また、以前からの懸案課題である浴室・入浴時間について解決しないまま持ち越してしまった

(デイサービス金峰やすらぎ館)

令和元年度は新規利用者契約数4件、利用終了者は7件で内訳として施設入居4名、入院2名、介護度変更1名であった。昨年比は一日平均件数で マイナス0, 1件であった。新規利用に対し利用終了が多かったが追加利用の希望者も増え、利用者数の減少に対し利用実績の目立った落ち込みはなかった。しかし、利用者の高齢化と共に他施設への移行が予想される為、積極的な営業の展開を繰り広げていきたい。

<ほほえみヘルパーステーション>

1年間の新規利用者は14名あったが、利用終了者が17名で内、死亡終了が3名ありました。修了者の中には、クオーレ入所の方が3名あった。下半期にし訪問介護の世帯数も増え、確実なサービスにつながった。今後も新規利用者の獲得に努め個人のニーズに応じたサービスが提供できるように努めてまいります。

<かせだフレンドホーム>

1人ひとりの「気づき」を大切に、各部署の連携を密にして長期入院とならないように共通認識で取り組み事ができた。また、入退所についても共通認識で関係機関との連携を図り、スムーズな入退所へ繋げることができた場合もあったが、一部在宅からの入所に時間を要したので、待機時より連絡調整を行っていくこととする。

<相談支援事業彩>

障害者計画相談については前年度より微減傾向にはあったが平成30年度の制度改正により施設入所利用者のモニタリング期間が1年ごとから半年ごとへ変更となったため障害福祉サービスの更新に伴い施設入所利用者のモニタリング回数も少しずつ増えてきている。障害児相談支援については新規契約や利用者本人、保護者等も含めた家族支援を必要とする利用者の増加によりモニタリング回数や頻度が毎年増加している傾向にある。障害者、障害児計画相談ともに今後も行政や地域、各サービス事業所等と連携を図りながら、安心して地域での生活を送れるよう支援体制を整える。

<グループホーム金峰やすらぎ館>

- ・令和元年度は入退居が3件しかなく、いずれもスムーズに対応することが出来、平均の入居率98.9%と順調で、入院も少なく健康に過ごして頂きました。
- ・職員の確保が上手くいかず思うように外出援助等行えなかったが、入居者の方々への処遇面では工夫を凝らし、ご家族の方に来ていただき館内で行事を行ったところ、入居者、ご家族共に好評で大変喜んでいただけた。

<グループホーム椎原館>

- ・令和元年度は、6月に2名、7月に2名、10月に1名、3月に1名が退去されました。
7月に3名、8月に1名、11月に1名が入居されています。
- ・待機者は、5名です。入居の申し込み数は鈍化しています。
- ・9月に常勤1名が退職、12月に常勤1名が入職しています。
- ・地域との関係作りに継続して努めております。

<グループホーム有馬館>

令和元年6月に開設いたしました。10月に1名退去され同月1名入居となりました。毎月見学相談者の受け入れも順調に行われていましたが、新型コロナウイルス感染予防のため現在は電話などでご相談申し込みなど受け入れております。待機者は現在10名です。開設当初からの8名の職員で支援にあたっております。運営推進会議では自治会長様、民生委員、市職員に参加していただき地域の情報交換に努めております。職員の内部研修、外部研修も参加ができ認知症介護の質の向上につなげております。

<クオーレかせだ>

令和元年6月1日開設以来、満床を目標に事業展開してきました。令和2年3月31日現在の在籍数は30名（単身28名 夫婦1組の入居者）となっております。入居利用対象者を要介護認定者に限定してスタートしましたが、要支援認定者の中に、在宅生活に不安を持たれる方や病院退院者からの相談が多く、入居対象者として受け入れてまいりました。その結果、ケアハウスかせだの入居対象者との重複が見られ今後の連携が課題です。